シリーズ・病院

平塚市民病院（平塚市）

栗原佑一

当院は1968年（昭和43年）に開設され、私の赴任した2018年（平成30年）に開設50周年を迎えました。中南国保病院が解散し、経営主体が平塚市に移管されたことを受けて誕生し、以来地域医療に貢献しています。

皮膚科に関しては1991年（平成３年）から常勤医師が慶應大学の医局から派遣されるようになり、木花いづみ先生、藤尾由美先生に続き私が３代目の部長となっております。神皮13号（2001年・木花）や25号（2018年・藤尾）にも当院の紹介が載っておりますので、見比べていただけますと幸いです。

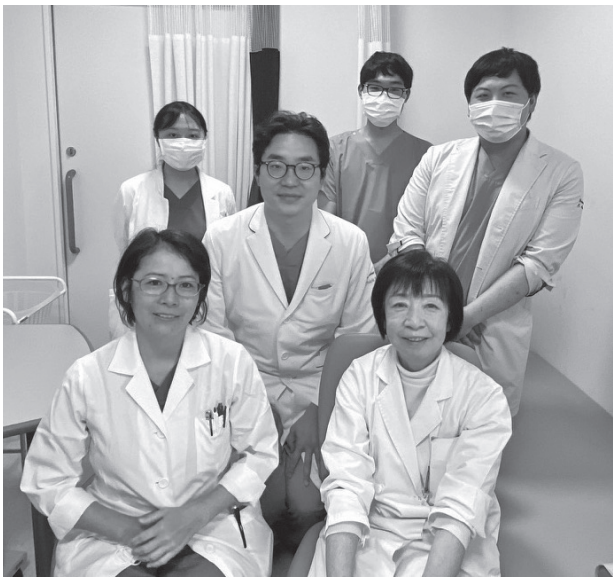
平塚市民病院皮膚科の歴史について言えば、開設から27年間にわたって部長を務め、現在も非常勤で働き続けている、当院の歴史そのものとも言える木花いづみ先生の話になってしまいます。その木花先生が2017年に退職され、新しい世代で再スタートをきっておりますので、本稿では「その後」の話を書きたいと思います。

病院について

平塚市と大磯町のほぼ境に位置しており、2019年に完成した新館からは相模湾と湘南平（高麗山）が一望できます。新館は１階に救急センター、屋上にヘリポートがあり、３次救急病院にも認定されています。また、皮膚科外来も新館にあり、まだ綺麗な状態を維持しています。一方､皮膚科病棟は本館（古い病棟）にあり、夜中は幽霊がでそうな雰囲気です。浴槽を備えた病院は減少傾向にあると思われますが、本館にはまだ浴槽付の病室が残っており、PUVA-bath療法で役に立っています。

皮膚科について

当院は平塚を中心に伊勢原、秦野、中郡（大磯・二宮）など神奈川県の西側の皮膚科急性期治療、悪性腫瘍を担当しており、バリエーション豊富な疾患をバリバリ捌く昔ながらの病院です。慶應大学からの出向医師４名体制となっており、この規模の病院としては大変恵まれています。外来に関しては、相当数の中核病院が（完全）予約制へ移行していると思われますが、当院では予約がなくても患者を受け入れる体制を維持しております。非常勤になられた木花先生や近隣の診療所にも支えられながら診察しております。最盛期には１日120人以上を診療していたそうですが、地域連携の進展により昨年度は１日57人まで減っております。その分、周辺の皮膚科や内科のクリニックが忙しくなってしまっているようで、平塚市の今後の課題です。入院に関しては、年間250人程度の入院を維持しております。内訳が変化してきており、以前より蜂窩織炎や帯状疱疹の患者が減って、水疱症や悪性腫瘍の患者が増加傾向のようです。また、この数字には後述します「肺炎」



中列筆者
前列左より藤尾医師、木花医師

の患者も含まれております。

業務に関しては比較的手を動かすものが多く、ここ数年は年間で手術600件、生検250件程度対応しております。医師が多いわりに、皆ずっとバタバタと働き回っています。新館にある皮膚科外来には充実した外来手術室が設けられており、コロナ禍で入院が難しくなっていた時期もあったため、簡単な皮弁や植皮までは外来で対応するようにしております。入院や全身麻酔が必要な患者も増えており、今年度からは木曜日に１日通しての全身麻酔での手術枠が与えられました。枠が使いきれないと危惧しておりますので、諸先生方からのご紹介を期待しております。

皮膚科は内科系か外科系か

これは当院では定期的に話題になり、日臨皮会誌にも2021年に勤務医だよりで触れさせていただいております。当院では長らく皮膚科は内科のメンバーとして数えられており、当直をお手伝いしております。2021年までは内科１次救急当直を担当しており、ヒヤヒヤしながら救急外来に詰めていました。2021年からは内科病棟日直が担当となり、土日のどちらかは皮膚科が内科病棟の対応をしています。急変や重症対応も多く勉強になることも多いのですが、コロナの波が来ている時はその数の多さに愕然としていました。若手の先生には非常に不評なので、いつか外科系当直に変わるかもしれません。

それとは別に、コロナ肺炎ピーク時に始まった制度ですが、ここ２年ほど内科医師の負担を軽減するために「コロナではない肺炎」の患者は全診療科で分担して入院を担当しています。昨年度は34人の肺炎患者を受け持ちました。こういった診療科を横断して対応する体制は高齢化社会が進むと今後普及していくのかもしれません。

質の高い皮膚科診療を提供できるよう、近隣のクリニックや病院の先生方と連携しながら、努力してまいります。コロナも５類感染症になり、対面式の研究会や学会も復活してくると思われます。皆様とface-to-faceでお会いできるのを楽しみにしております。今後とも平塚市民病院をどうぞよろしくお願いいたします。

横浜栄共済病院（横浜市栄区）

田中理子

当院の最寄りはJR京浜東北線本郷台駅です。駅前からは１時間に２本ほど病院行きの無料シャトルバスが出ていますが、徒歩でも10分弱の道のりです。駅のロータリー左手方向、近未来的な外観の神奈川県立地球市民かながわプラザ前の道路を直進すればやがて到着ですが、その間に１つ川を渡ります。第２級河川で栄区を東西に流れる「いたち川」で、川の両岸には桜の木が植えられていて、花の季節は人々の目を楽しませてくれます。また、いたち川には、ゆるキャラとして栄区内で活躍しているマスコット、「タッチーくん」がいます。私はまだ実物のイタチを目撃したことはありませんが、川面には時折大きな鮒が見えたり、鷺が静かに立っていたり、つがいの鴨が泳いでいたりすることもあります。

筆者左端

そのようにのどかな自然を感じられる環境にも囲まれている当院ですが、名前のとおり、国家公務員共済組合連合会に属しており、1939年、大船海軍

共済組合病院として開設されました。戦後1945年に大船共済病院となり、1986年所在地が戸塚区から分かれ栄区が発足した際「横浜栄共済病院」と改称されました。2019年には改築整備され、現在非常にきれいな病院となっています。

栄区では唯一の救急医療機関で、横浜市の承認を受けた地域医療支援病院でもあり、近隣の多くの医療機関と連携しています。医療圏としては、栄区はもちろん、隣接する港南区·戸塚区·磯子区や鎌倉市などからも患者さんの紹介を受けています。病床数は430床で、皮膚科もその一端を担い、入院·外来診療を行っています。横浜市立大学皮膚科の医局に所属しており、現在は３名の常勤医体制です。

栄区の高齢化率が非常に高いためか、受診患者さんの平均年齢もかなり高くなっている印象で、紹介を頂く疾患としては、帯状疱疹·蜂窩織炎などの感染症に加え、うっ滞性皮膚炎や水疱性類天疱瘡などが目立ちます。褥瘡も多いですが、こちらにつきましては月に２回、形成外科と交互に担当している褥瘡外来もあり、皮膚·排泄ケア認定看護師と一緒に診察に当たっています。

その他に皮膚科としての専門外来は設けていませんが、年齢を問わずアレルギー精査目的の紹介は多く、パッチテスト（10月～５月）やプリックテストを随時行っております。また、難治性のアトピー性皮膚炎や尋常性乾癬などに対してはNBUVB照射療法を行っています。ターゲット型のエキシマライトは装備がないため、光線療法を考慮したい円形脱毛症や掌蹠膿疱症、手湿疹などにつきましては、機材をお持ちの近隣クリニックに逆紹介させて頂くことがあります。

手術は日々の皮膚生検に加え、粉瘤·脂肪腫など良性腫瘍の単純切除、悪性腫瘍も比較的小さなものであれば切除および植皮術まで行っています。外来処置室での手術がメインですが、内容に応じて手術室を利用することもあります。ただ、悪性腫瘍につきましては、悪性黒色腫が強く疑われるものや、他の腫瘍でも転移をきたしたものなどは主として横浜市立大学附属病院に紹介をしており、化学療法は行っておりません。

自費診療は、男性型脱毛症の内服治療を除くと、現在陥入爪に対するワイヤー治療のみですが、マチワイヤーとコレクティオの施術が可能です。美容関連は、レーザーの機械を持っている形成外科にお任せしています。

このように、格別に特色のある検査や治療が可能なわけではありませんが、ご紹介頂いた疾患に対して、できる限りきちんと診断をつけ、最良の治療につなげていきたいと思っております。今年（2023年度）は新入局の医師もおりますので、科内での連絡を密にし、勉強の機会を多く設けて全員で皮膚疾患への理解を深めていきたいと思います。乾癬に対する分子標的薬使用承認施設として申請中であり、今後、アトピー性皮膚炎に対するJAK阻害剤も含めて治療の選択肢を増やし、地域の患者さん達に最新·最適な医療を提供していければと思います。近隣皮膚科の先生方には、今後ともご指導ご鞭撻頂ければ幸いに存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

横浜市立みなと赤十字病院（横浜市中区）

渡邊　憲

横浜市立みなと赤十字病院は2005年に開院し、今年で19年目を迎えました。このタイミングで病院紹介を仰せつかりましたが、特に大きく体制が変わったわけでも、新しい設備を導入したわけでもなく、近隣の基幹病院と比べて取り立てて自慢するようなことはありません。そこで、通り一遍の読み飛ばされてしまいそうな文章を書くのは止めて、皆さんが薄ら疑問に思っていることに応えたいと思います。

最大の謎は、この長い病院名でしょう。設立主体は横浜市、運営は日本赤十字社であることによります。2002年に就任した当時の中田宏横浜市長は、その年に横浜市立病院あり方委員会を組織しました。同委員会の答申をふまえ2004年２月の市議会において、横浜市立港湾病院の指定管理者を日本赤十字社とすることが決まりました。その背景として、当時は小泉政権時代（2001年４月から2006年９月）であり、財政再建･構造改革･民営化が中央政府でも地方公共団体でも盛んに行われていました。2003年に地方自治法が一部改正されて、指定管理者制度が発効しました。中田市長が松下政経塾出身であることも関係していると思われます。

現在では公立病院の指定管理は珍しくありませんが、管理者名を名乗ることは多くありません。日本赤十字社は日本赤十字社法により規定された認可法人であり、病院運営以外にもジュネーブ条約などの国際法なども関わる赤十字社としてのタスクが課せられています。また、赤十字マークの使用にも特別な規定があります。このことが、長い名前の原因と推察されます。実際にどんな取り決めがあったのかは調べても分かりませんでした。横浜でも長く活動している、赤十字の名前を無くすわけにはいかなかったのかもしれません。

1877年５月１日に佐野常民らは日本赤十字社の前身となる博愛社を創設しました。それに続く1896年、日本赤十字社神奈川県支部が設立されます。当時の社屋は横浜市伊勢町（現西区紅葉ヶ丘）、現在の神奈川県立青少年センターの場所にありました。1923年の関東大震災で焼失したため、中村町（現南区中村町）の玉泉寺境内に米国から寄贈された組立家屋を建てて仮診療所としました。その後、芝生町（現磯子区東町）には大村民蔵氏の経営していた結核療養所、横浜根岸療養院がありましたが、結核患者を郷里に帰し、そこを借り受け救護本部としました。翌1924年３月に結核治療を継続することを条件に、この療養院を無償譲渡され６月20日に根岸療院に改称しました。1944年４月戦時看護婦補充のため乙種看護婦養成所が併設されました。

皮膚科外来は運河に面しており、緊急用の船着き場が設置されています

神奈川県支部（事務部門）は1928年11月に完成した神奈川県新庁舎に間借りすることになりましたが、1934年には現在と同じ中区山下町に完成した社屋に移転しました。

戦後、1946年６月に根岸療院は診療科目を内科･小児科とし横浜赤十字病院と改称しました。建物は古く増改築を繰り返しており不便であったため、戦後まもなくから改築は懸案事項でした。横浜市の中央部は接収されており、米軍兵舎が立ち並び、飛行

場もあるような状況であり、土地の取得は困難でした。当時の病院の目前、横浜市主要地方道82号より南側は砂浜でしたが、進駐軍により焼け跡の瓦礫や廃棄物を投棄し埋め立てられ、その後に市に移管されました。1964年５月１日にその埋め立て地に建てられた新病院（301床。うち結核病床95床）を開業しました。最終的に380床まで増床されます。横浜赤十字病院は横浜市立みなと赤十字病院が開設するにあたり閉院となり、現在、同地には神奈川県立衛生看護専門学校とマンションが建っています。

一方で、横浜市立港湾病院は1962年に中区新山下の現在の当院の通りを挟んで反対側、フットサル場があるあたりで開業しました。名前の通り港湾労働者の労働災害を対象とした122床の病院でした。これは横浜マリンタワーと並ぶ、横浜開港100周年記念事業の一環でした。周囲に住宅地が増えるにつれて、港湾関連の患者の割合は減少し、病院に対するニーズも変化してきました。このため、増改築が行われ1975年５月に300床にまで増床しました。それでも、徐々に設備の老朽化や救急診療の充実など時代のニーズに合わなくなり、前述の如く改組されることになります。

最後に、本稿の参考資料を集めているうちに、当地新山下町の興味深い沿革が明らかになりました。新山下町は1923年にできた埋め立て地ですが、それ以前は港が見える丘公園のある山手町の崖の下は山下海水浴場であったようです。当院と屋外駐車場の場所は戦前から石油倉庫があり、それより沖合にはバス停の名前として残っている貯木場がありました。戦後になると本牧埠頭の位置にはヨットハーバーが出来たようです。そして、20世紀の終わりにはカジノどころではない、ビッグプロジェクトが立ち上がります。1998年７月24日に来日した、あのマイケル･ジャクソン氏は、マイケル･ジャクソン･ジャパン株式会社を設立し、当院の敷地を含めた新山下町に『ワンダーワールド』と称するテーマパークを開設する総事業費200億円に上る計画を発表しました。その結末は皆さんがご存知の通りです。